

# 功績賞贈呈

(写真：敬称略)

本会選奨規程第7条（電子工学および情報通信に関する学術または関連事業に対し特別の功労がありその功績が顕著である者）による功績賞（第69回）受賞者を選定して、次の5名の方々に贈呈した。



伊澤達夫

## 推薦の辞

伊澤達夫君は、昭和45年東京大学大学院工学系研究科電子工学専攻博士課程を修了し、日本電信電話公社（現日本電信電話株式会社、NTT）に入社されています。平成4年には光エレクトロニクス研究所長、平成6年理事研究開発本部副本部長、平成8年取締役基礎技術総合研究所長を歴任されています。その後、平成10年にNTTエレクトロニクス株式会社代表取締役社長に就任され、平成19年からは東京工業大学理事副学長に就任され、現在に至っております。

日本電信電話公社入社後は、光通信基盤の構築に重要な光通信部品技術の開発に携わり、ブロードバンドネットワークサービスのインフラを実現するために多大な貢献をされました。

今日、幹線系の通信網では光通信が主流となっており、日本では光通信によるブロードバンドサービスを各家庭まで届けるFiber to the Home (FTTH)が普及して生活スタイルにも変化が生じています。同君は、このような高速大容量通信ネットワーク基盤を構成する主要技術である光ファイバについて、高性能で量産性に優れた画期的な製造法を発明されました。同君が発明した製造法は、気相軸付け（VAD：Vapor-phase Axial Deposition）法と呼ばれ、ガスバーナ中で合成した石英ガラス微粒子を吹き付けてファイバ母材を軸方向に合成するという独創的な着想に基づくものです。VAD法は高品質で大型な光ファイバ母材を短時間に連続製造でき、それまでの光ファイバ製造法に対して大幅に量産性と経済性に優れて

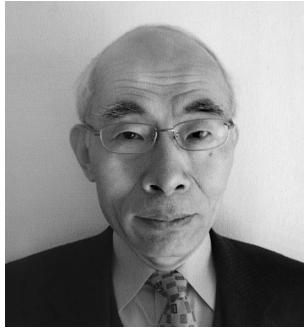
います。更に、同君は伝送帯域の拡大に重要な屈折率分布の精密制御法、低損失化に重要な脱水技術などの周辺技術を次々完成され、高性能な通信用光ファイバの量産技術を確立されました。

国内で生産されている光ファイバのほぼ100%はVAD法で製造されており、2006年度には約2,800万km（地球700周分）の光ファイバが生産されました。また、世界で製造されている光ファイバの約30%はVAD法によって製造されています。このように同君の発明は光ファイバ製造法の主流になり、今日の光通信インフラストラクチャ整備促進と光通信産業発展に多大な貢献をしました。

本会においては、平成10年度にエレクトロニクスソサイエティ会長、平成13年にフェロー会員の称号を授与され、平成18年度には本会会長になられて、本会活動の発展に尽力されました。またIEEEにおいては、平成9年にLEOS理事・副会長になられ、平成11年にフェロー会員の称号を授与されています。更に、科学技術振興機構CREST研究総括、同機構さきがけ領域アドバイザー等の要職も数多く務められ、日本の電気通信技術の発展に大いに貢献されました。

このような業績は多方面から高く評価されており、昭和57年に科学技術庁長官賞、恩賜発明賞、昭和59年前島賞、平成19年C&C賞を受賞され、平成10年には紫綬褒章を受章されました。

以上のように、同君の本会及び電子情報通信分野における貢献は極めて顕著であり、本会の功績賞を贈るにふさわしい方であると確信致します。



釜江尚彦

## 推 薦 の 辞

釜江尚彦君は、昭和38年京都大学大学院工学研究科修士課程電子工学専攻を修了後、昭和41年イリノイ大学大学院博士課程を修了し博士号を取得されました。昭和42年日本電信電話公社（現日本電信電話株式会社、NTT）に入社され、昭和60年電気通信研究所複合通信研究部長、平成2年理事ヒューマンインタフェース研究所長を歴任されています。平成5年NTTを退職され、同年ヒューレットパッカート社日本研究所取締役情報研究所長、平成7年同研究所代表取締役所長に就任されました。平成11年同社を退職され、同年（財）イメージ情報科学研究所技術統括に就任されました。平成16年同研究所を退職され、同年情報通信研究機構（NICT）及び国立情報学研究所（NII）の非常勤研究員に就かれました。平成19年NICTのプロジェクトは終了し、NII非常勤研究員として現在に至られています。

日本電信電話公社入社後は画像通信、画像処理、ファクシミリ通信、オフィスシステムなどの研究開発に従事され、これら分野の発展に大きく寄与されました。特に、ファクシミリ通信技術の発展と普及には極めて大きな貢献をされました。それまでのファクシミリ通信は端末、通信料共に大変高価であり、小規模の事務所や一般家庭に普及することは困難でした。また、一般家庭に情報を一斉同時に伝達できるような技術も実現できていませんでした。この課題に対して同君は、高度なデジタル画像処理機能を有する蓄積変換装置を開発するとともに、当該装置を高速デジタル伝送路に配置するという全く新しいファクシミリ通信方式を確立することで、ファクシミリ端末を廉価なものにするとともに、一斉同報等の魅力的な機能を実現しました。これにより画像メディア

を扱う通信サービスが初めて一般家庭にまで広く普及することとなり、その後の高度情報流通社会実現への先駆けとなりました。

イメージ情報科学研究所においては、エンタテインメントコンピューティングという新しい研究分野を確立するために、国際情報処理連合（IFIP）において同分野の議論をするための組織化に尽力され、IFIP内のTechnical Committee設立実現に大きく貢献されました。また平成14年には、同分野に関する国際会議ICECの前身であるInternational Workshop on Entertainment Computing (IWEC)のGeneral chairを務められるなど、エンタテインメントコンピューティングという研究分野の発展のために大きく寄与されています。

本会においては平成12年度に情報・システムソサイエティ会長として情報処理学会と共同で情報科学技術フォーラム（FIT）の設立に尽力され、平成14年にフェロー会員の称号を授与されるなど本会の発展に大きく貢献されています。またほかにも画像電子学会会長（平成9～10年度）、情報処理学会理事（平成10～11年度）等の要職を歴任され、我が国の情報通信研究分野に大きく寄与されています。

このような業績は多方面から高く評価されており、昭和58年科学技術庁長官賞、昭和59年前島賞、昭和61年テレビジョン学会（現映像情報メディア学会）著述賞を受賞され、平成12年には紫綬褒章を受章されています。

以上のように、同君の本会及び電子情報通信分野の発展への寄与並びに長年にわたる社会貢献の功績は極めて顕著であり、本会の功績賞を贈るにふさわしい方であると確信致します。



平田 康夫

## 推 薦 の 辞

平田康夫君は、昭和40年に京都大学工学部電気工学第2学科を卒業され、昭和42年に同電子工学科修士課程を修了、同年国際電信電話株式会社（KDD）に入社されました。以来KDD研究所において衛星通信システムに関する研究開発に取り組み、昭和52年に同研究の成果が認められ京都大学より工学博士の学位を授与されました。

その後、昭和52年より2年間、国際機関インテルサット本部に出向され、インテルサット将来システムの計画・設計チームに参加されました。その間、同君は斬新な衛星中継器構成を提案し、デジタル通信技術との整合性、有効性が認知され、インテルサットVI号衛星に同方式が採用され1980年代後半より実用に供されるに至っています。

KDD研究所に復帰後、昭和56年よりKDD研究所衛星通信研究室長として、移動体アンテナの小形化や通信容量の増大を目的として、デジタル通信技術を適用した移動体衛星通信システムの研究開発に取り組み、数々の研究成果を挙げられました。特に、誤り率改善特性に優れ符号化率を柔軟に変えることができるパンクチャド符号化／ビタビ復号誤り訂正方式を発明・開発し、その技術を基に、当時アナログ通信技術を利用していたインマルサット海事衛星通信システムのデジタル化を世界に先駆けて提案され、同時に、具体的な通信システムの開発・フィールド実験・標準化等を推進し、国内外の業界をリードしながらその実用化と利用拡大に貢献されました。なお、同君が考案、開発したパンクチャド符号化方式は、その後、日欧の衛星及び地上デジタル放送システムにおいても必須の誤り訂正方式として採用されるに至っています。

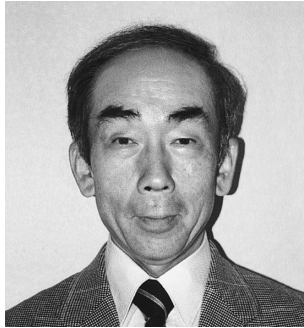
同君は、本会監事、運営委員会副委員長、研究専門委

員会委員長をはじめとする学会活動に加えて、米国IEEEや米国宇宙航空学会（AIAA）などに対する学会活動にも熱心に取り組み、それらの功績により、平成9年にIEEEよりFellow、平成14年に本会よりFellowが授与されています。

更に、同君は、長年にわたり、国内外の標準化活動にも積極的に取り組み、昭和60年以来、CCIRにおける移動体衛星通信サービスの技術標準、周波数問題などを取り扱う分科会の議長を12年にわたって務め、現在世界中で広く使われている世界海上遭難安全システムのベースとなる勧告をはじめ数多くの勧告の作成に貢献されています。標準化にかかわる国内活動としては、昭和63年より平成12年に至るまで電気通信技術審議会の無線通信委員会移動業務専門委員会の主査を務め、更に、平成5年より18年までIMT2000研究委員会副委員長を、平成17年より19年まで電波産業会規格会議委員長を務め、無線通信にかかわる我が国の標準化活動に積極的に貢献されています。その他、総務省をはじめとする多くの政府系審議会、研究会等の委員を務め、我が国の情報通信分野の発展に多大な貢献をされています。

これらの業績によって同君は、本会業績賞・森田賞、科学技術長官賞、前島賞、日本ITU協会賞、紫綬褒章、2007年電波の日総務大臣表彰を授与されるとともに、海外からも、平成16年にAIAAよりSpace Communication Awardを、平成18年に米国IEEEよりAward in International Communicationを受賞されており、平成19年には衛星通信に顕著な功績のあったものが選ばれるSSPIの衛星殿堂入りも果たしておられます。

以上のように、同君の国内外における学術研究のみならず産業界の発展に寄与された功績は誠に顕著であり、本会の功績賞を贈呈するにふさわしい方であると確信します。



古井 貞 熙

### 推 薦 の 辞

古井貞熙君は、昭和45年に東京大学大学院工学系研究科計数工学専攻修士課程を修了され、日本電信電話公社電気通信研究所に入所されました。昭和53年に東京大学から工学博士を授与され、同年から1年間、米国ベル研究所客員研究員を務められました。昭和61年に日本電信電話公社基礎研究所第四研究室長、平成元年に日本電信電話株式会社ヒューマンインタフェース研究所音声情報研究部長、平成3年に同研究所古井特別研究室長、平成6年に東京工業大学大学院情報理工学研究科計算工学専攻客員教授、平成9年に同教授となり、現在に至っています。平成19年より同大学院情報理工学研究科長を務められています。

同君は、永年にわたって、国際的なレベルで、音声情報処理、特にコンピュータによる話し言葉音声認識の研究と教育に努め、音声の認識・理解の基本技術を提案して、技術の進展に貢献するとともに、多数の研究者を育成されました。それらの研究者は現在、国内・国外で音声を含む情報技術の研究者・技術者として活躍しております。

同君は、特に、音声の動的特徴が人の音声知覚に重要な役割を果たしていることを明らかにするとともに、音声スペクトルの動的特徴を用いた音声認識方法を提案し、認識性能の大幅な向上に貢献しました。この方法は現在の世界中の音声認識システムで用いられています。また、話者による声の違いや背景雑音による音声の変動が、音声認識性能の低下の重要な原因の一つであることに着目するとともに、人間の聴覚が極めて高い適応力を持つことを実験的に確認し、その能力をコンピュータで実現するための、種々の適応化基本技術を提案しました。

更に、平成11～15年度科学技術振興調整費「話し言葉工学の構築」プロジェクトの総括責任者として研究を推進し、世界最大かつ最高精度の話し言葉音声データベース（コーパス）を構築するとともに、これに基づく研究により、話し言葉音声認識及び音声要約技術の大幅な進展に貢献しました。このコーパスは標準的な音声コーパスの一つとして、多数の研究者に広く使われています。また、平成15年度より、21世紀COEプログラム「大規模知識資源の体系化と活用基盤構築」の拠点リーダーとして、電子化された大規模コンテンツに関する文理融合研究の推進に貢献しています。

同君は、以上の業績により、数々の賞を受賞しています。代表的なものとしては、昭和60年と62年に日本音響学会佐藤論文賞、昭和63年、平成5年、及び平成15年に本会論文賞、平成元年に科学技術庁長官賞（研究功績者表彰）、及びIEEE ASSP Society Senior Award（論文賞）、平成2年に本会著述賞、平成15年に本会業績賞、平成18年に文部科学大臣表彰（科学技術賞・研究部門）、IEEE SP Society Award、及び紫綬褒章を受けておられます。また、IEEE、米国音響学会、及び本会のフェローでもあります。

学会活動としては、IEEE Signal Processing Society 理事（平成13～16年）、日本音響学会会長（平成13～15年）、International Speech Communication Association (ISCA) 会長（平成13～17年）、本会理事・企画室長（平成16～20年）、日本学術会議連携会員（平成18年～）などを歴任し、現在も国際的な活動の発展に御尽力されています。

以上のように同君の本会及び電子情報通信分野における貢献は極めて顕著であり、本会の功績賞を贈呈するにふさわしい方であると確信致します。



宮原 秀夫

## 推 薦 の 辞

宮原秀夫君は、昭和42年に大阪大学工学部通信工学科を卒業し、昭和47年に大阪大学大学院工学研究科通信工学専攻博士課程を単位取得退学、翌昭和48年1月に大阪大学より工学博士の学位を授与され、同月、大阪大学工学部助手に就任されました。昭和55年に大阪大学基礎工学部助教授、昭和62年に大阪大学計算機センター教授、平成7年に大阪大学大型計算機センター長、平成10年に大阪大学大学院基礎工学研究科長・基礎工学部長、平成15年に大阪大学総長となり、平成19年に(財)地球環境センター理事長、同年、独立行政法人情報通信研究機構理事長となって、現在に至っております。

この間、日本学術会議委員、総務省情報通信審議会委員、総務省独立行政法人評価委員会委員、文部科学省科学技術・学術審議会委員、国立大学協会国公立大学団体国際交流担当委員会協議会座長等を務められ、学術行政に関しても大きな貢献をなさっております。

同君は、コンピュータネットワークのモデル化にいち早く取り組み、米国防総省のARPANETの開発段階から、後のインターネットとなる、その到達確実性と低コスト性を併せ持つネットワークモデルに着目して、研究対象とされました。そして、このネットワークモデルでのデータの破損率や遅延率などの性能評価に取り組み、ネットワーク設計に必要な各種のパラメータと、性能及びコストへの因果関係の解明、そしてその因果関係に基づくシミュレーションによる定量的な解析などの研究に大きな成果を挙げられ、このネットワークモデルにおけるパケット交換技術の優位性を理論的に証明されました。そして、これらの研究成果によって、インターネッ

トの可能性を明示し、そのネットワーク設計手法に理論的な裏付けを与えて、実用的なネットワーク基盤の確立に多大な貢献をされました。

また、その後はLANについての研究に取り組み、LAN環境が構内ネットワークの分散処理システムとなるアーキテクチャの根幹としての、多重アクセス制御方式に関して大きな成果を挙げられました。更に、ATM LANでの新しいスイッチ・アーキテクチャの提案と性能評価や、IPv6の研究開発に関しても、先駆的な役割を果たしてコンピュータネットワークの幅広い領域に多大な貢献をなされました。

以上のような数々の業績に対し、平成3年には本会の論文賞を受賞され、平成11年には業績賞が授与されています。更に平成14年には本会フェローの称号が贈呈されています。また昭和61年には第1回電子通信普及財団テレコム自然科学賞、平成4年に近畿電気通信管理局長表彰、平成9年に通商産業大臣賞、平成13年に日本医用画像工学会学会賞、平成14年に第6回エリクソン・テレコミュニケーション・アワード、平成15年に総務大臣表彰を受けられ、また平成9年にIEEEフェロー、平成14年に情報処理学会フェローの称号も贈呈されています。

また本会においては、編集理事、次期会長などを歴任し、本会活動の発展に継続的に御尽力されており、更に平成20年度は会長としての重責を担われることとなります。

以上のように、同君のコンピュータネットワークを中心とした情報通信工学分野及び本会における功績は極めて顕著なものがあり、本会の功績賞を贈呈するにふさわしい方であると確信致します。

